都会で怨霊退治

伽ノ花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
都会で怨霊退治

【Ｎコード】
Ｎ１１６９Ｂ

【作者名】
伽ノ花

【あらすじ】
学校では居眠りをし、真夜中に怨霊を退治を行う、双子の少女のお話。

プロローグ

私達は違う。

そう普通の人とは。

そんな事は前からわかっていたのに。

どうして、こんなに悲しいのだろうか。

ねぇ？誰か教えて…

第1話

ドドドーーーー。
ガシャーーーーー！
「はぁ、はぁ…」
「間に合ったーーー！」
チャイムが鳴り終わると同時に、二人一緒に教室にゴールイン！
パチパチパチパチ。
見事な滑り込みに、拍手がなり響く。
どうも、どうもと手を振りながら悠々と席に着く。
ガラーーー。
席に着いと同時に先生が教室に入ってきた。
「起立、注目、礼」
『おはよーございまーす』
「はい、おはようございます」
「それでは、出席を取ります」
遅刻率Ｎｏ１、今日もぎりぎりで登校してきた、双子の方を見つめ、
「今日は、遅刻ではないのですね、いいことです」
『ブッ…』
一人が笑いをこらえられなくなり、ふきだした途端、
『ブッ、あはははは…』
その、笑い声の中、双子はだんまりと机だけを見つめてすごした。
「はいはい、皆さん、今日の連絡をしますよ」
担任は、そのまま、そそくさと必要な連絡だけ言い終え教室を後にした。

毎日変わらない、中学生活のはじまりだ。
と、言ってもこの二人は睡眠学習をしているだけだが。
「おーい！安倍の姉妹！起きなさい！」

ｚｚｚｚｚｚ
起きる気配は、まったくない。
教科が変わるごとに先生達が必死に起こそうとするがおきる気配０！
生徒達もすでにそれになれてしまっている。
そして、給食の時間に起きて、また睡眠学習へと戻っていく。
帰りのＳＨＲには、目を覚まし、すっきりした顔で。
帰路に向かうのだ。
それが、この姉妹の学校での生活である。
それじゃ？夜はなにをしているかって？
気になる？
それが、ここからのお話です。

第2話

「祐美っ！後ろ！！！」
「えっ！」
言われて振り向いた時にはすでに遅かった。
どす黒い、大きな腕にはじきとばされ、宙に浮いていた。
「っ…」
宙で体勢を立て直し、地面に着地する。
「奈美、私が敵を引き寄せる！その間に結界をっ！」
そう、ここは真夜中とかいえ、大都会。
すくなからず人通りもある。しかし、怨霊は普通の人には見えないから問題はないものの、
私達の姿は見えてしまうのである。
こんな真夜中に、中学生が二人どう考えてもおかしな動きをしていたら、怪しまれるどころか
補導されかねない。
結界をはれば、その中の物は全て見えなくなる。
もちろん、怨霊も周りを歩いている人間には手出しは出来なくなる。
ッタと、地面を蹴って、どす黒い塊の目の前に立つ。
「鬼さんっ♪かかってらっしゃい」
そうやって、怨霊が裕美を見ている隙に、私は、周りに結界を張る。
「……いでよ、結果！」
「裕美結界は、張れた。後は、御札をこいつの額にっ！」
「言われなくても、わかっているわよ」
そう、言うと同時に御札を宙から取り出し、走り出す。

しかし、何故か御札を貼る前に目の前にいた敵が、煙となって…
怨霊は消えてしまったのである。
「え…？奈美なんで…？」

後ろを振り向いた。
「ふんっ、安倍の者も所詮はその程度のものか…くだらん」
そこには、漆黒の長髪を風になびかせ立っている、少年がいた。
嫌、もう一人、白銀の髪の少年も…。
何故だか、とても寂しそうな顔をしてこちらを見ている気がする。

第3話

次の日、裕美は一日中イライラしていた。
そう、学校で寝ない程に。
そう、昨日出会った少年二人が、私達の学校。
し・か・も。同じクラスに転校してきたのである。
顔は、言うのは嫌なんだけど、とてもかっこいいのである。

「俺は、宮野龍夜です、これからよろしくお願いします」
黒い髪の少年はそう自己紹介をした。
「私は、宮野龍湖お願いします」
クラスの女の子達はキャーキャー言いながら、二人の席の近くで、
我先にと名前を覚えてもらおうと必死になっているが。
私、裕美にとってはにっくきライバル、絶対に近づきたくもなければ、話たくもない相手と
勝手にきめつけているのである。
その、上宮野の兄弟は、運動神経抜群、成績優秀、美和麗しいと、
すぐに学校中の評判になっていったのである。
評判が良くなるにつれて、裕美のイライラも更にヒートアップしていった。
しかし、奈美は落ち着いていた。
そう、全てを知っているように。
知らないのは、私だけ？
それが許せなかった。

「裕美…」
「そんなに、泣かないで？貴方達には俺達がついているでしょう…？」
「だって、だって…皆がっ…」

目を真っ赤にはらしながら泣いている…。
これは自分…？
小さい頃の…そう言えば、幼稚園の時に、いじめられたんだっけ…？
そういえば、あの頃誰かに助けてもらっていたような…？
誰…？
思い出せない…。
それは、深い深い夢の中にしまわれてしまっていて、思い出せない。
これは、夢そう、夢…。
だけど、これは現実にあった。

第4話

「ねー、みーちゃん、みーちゃん？あそこに誰かいるよ？」
「何言ってるの？みーには見えないよ？」
「えー！あそこにいるよね？ねー、なみー」
「うん、こっち見てるね」
そう、そうやって、少しずつ、私達二人は変な子扱いされていったんだ。
嘘は、言っていない、現実に見えるものだから。
だけど、普通の人には見えない。
そう、そうやって自分の見えたものを素直に言っただけで、私達は周りから差別されるようになった。
あの子達はおかしいと。
そう、先生までもが…。
私達は、次第に幼稚園に行きたがらなくなった。
お父さんと、お母さんは大層心配していた。
代々怨霊退治をなりわいとしているこの家庭では、周りから差別されることは、
ほとんど日常的なことなのである。
しかし、まだ幼いこの二人にそのような事がわかるわけもなく、
子供がつらい思いをしているというのに家族は何もできないのである。
だからと言って、幼稚園に行かせないわけにも行かない。
「困ったものですね～」
母が、はぁ～と溜息をこぼす。
「使い魔を持たせるのは少し早いが…裕美と奈美の話相手になってくれるであろう…」
「そうですね、まだ力は解放していませんし…とりあえず、小学校へ上がるまでという形になりますかね」

「周りから見えないのだ、二人とずっと一緒にいれる。私達よりよっぽど二人の力に…」
「本当は私達が、手助けしてあげたいのですが…」
お茶を飲みつつ、そんな話が行われていた。
「裕美と奈美をここに、呼んできてくれるか？」
「はいはい、わかりましたよ～」
そう、言って母はこの部屋を出ていった。

第5話

「裕美〜、奈美〜、お父さんがお呼びよ〜！」
「いやっ！どうせまた幼稚園にちゃんと行きなさいってしかるんでしょう！」
裕美がくってかかる。
「絶対嫌！」
奈美も嫌がって二人部屋の隅で小さくなっている。
「そうじゃないのよ…」
「え？」
二人で顔を見合わせた。
幼稚園に行きなさいって言う以外に私達を呼び出す理由が見つからないのだ。
「裕美とね、奈美にお父さんからプレゼントだって。とっても気にいると思うわよ？」
「ぷれぜんと…？」
「そう、プレゼント、ね？一緒にお父さんの部屋に行きましょう」
「どうする、美奈？」
「お父さんは、嘘は付かない…。行ってみよう…」
ガラガラっ。
扉を開けて部屋に入る。
「お父さん！プレゼントってなーにー？」
「あー、二人ともこっちへおいで」
近づくと、床に二つの小箱がおかれていた。
「はい、どっちがいい？」
「うーん…裕美はこっち！」
裕美は、即答した。
「美奈は、こっちでいいかい？」

「うん」
「中を開けてご覧」
木箱を手に取り、蓋を開ける。中には綺麗な水晶玉が入っていた。
「プレゼントってこれ？」
「そうだよ、手にとってご覧」
触ってみる。ひんやりしていて気持ちいい。
落とさないように、両手の上に…
その、瞬間水晶玉が輝きだした。
目を開けていられない程の激しい光。
二人は、目が痛くて目を閉じた。
「ま、ぶしい…」
少しして、おそるおそる目を開けると、
そこには、二人の少年が。
そう、だ…使い魔だったんだ…。
だから、美奈は…
知っていて当然だった。
なのに…私は…
夢で見てやっと、使い魔の事を…。

第6話

そこには、とても綺麗な少年が二人ならんでいた。
髪の色が違うだけの、そう、私達と同じ双子のように同じ顔をした少年が。
「裕美、これからよろしくね」
黒い髪の少年は私に、優しく声をかけ、手をのばしてくれた。
「うん、お兄ちゃんお名前なんていうの？」
奈美も、同じ事を聞いている。白い髪の少年に。
「名前は、まだないんだ…裕美がつけていいんだよ？」
「じゃーりゅうや、だめ？」
「今日から俺はりゅうや、裕美の使い魔」
奈美は、名前を決めてと言われて相当悩んでいたらしい。
悩んで悩んで…
「裕美の使い魔がりゅうやだから、お顔似てるし…りゅうこじゃだめかな…」
「はい、私は、りゅうこ。奈美の使い魔」
いつも、いつも、一緒にいてくれた。
そう、楽しいときも悲しい時も。
でも、唐突にわかれが告げられた。
小学校へ、上がる前日に…。
「もう、俺達は必要なくなった」
「私達がいなくても、お二人は十分にやっていける」
「だから、俺達とはここでさようならだ」
「永遠にさようならってわけではないんですよ？お二人が、もっと、もっと強くなって、本当の意味で私達が必要になった時私達はまた現れます」
「そして、またお二人の使い魔に…」
「ひっく…ぅ…嫌だよ…裕美は…りゅうやと離れたくない…」

「うっ…奈美も…」
二人とも目を真っ赤にはらして泣き続けている。
「いやだっ…そんなの…」
「また、私達を一人にしちゃうの…？」
「ねぇ…」
「もう、大丈夫…貴方達は、どうすれば、他の子達と仲良くなれるかわかったでしょう？」
「うっ…ひっく…そうだけどっ…」
「行かないで…だめっ…！！！」
使い魔の、足に抱きついて必死にすがろうとする。
「だめですよ…奈美…」
「裕美離れなさい…」
「そんな事したって無駄だとわかっているだろう？」
「っう…やだっ…」
そうして、半ば無理矢理、使い魔は二人の元から姿を消した。
それから、使い魔の姿を探し回った…。
だけど、一度も会うことは叶わなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1169b/

都会で怨霊退治

2010年12月13日21時27分発行